

学修成果欄からみえる書くことに対する学生の意識変化

—「日本語表現T1」小論文の学修成果欄から—

小林 珠子
KOBAYASHI Tamako

1.はじめに

愛知淑徳大学において、全学の1年生前期に必修となっている「日本語表現 T1」では、3本の小論文が課題として課されている。学生は、テキストに付属されている専用の提出用紙を使用し、小論文課題に取り組んでいる。1本の小論文を完成させるにあたっては、準備（ブレンストーミング）、執筆（学生が互いの下書きを読みあい添削を行う）、推敲（相互添削をもとに推敲し完成稿を執筆する）の3つの手順を踏むこととなる。この提出用紙には、課題作成欄に加え学修成果欄というものが設けられている。学修成果欄は、学生が自らの学修態度を振り返り、講義でどのような知識を得たのか、得たものをどのように課題に生かしたかを記述するためのものである。なお、学修成果欄への記入は推敲を終えたあと、行なわれる。筆者は学生の課題を添削するなかで、学修成果欄の記述内容には、学生によってばらつきはあるものの、そこには2つの傾向が見られることに気づくようになった。1つ目は、テキストには、教員が小論文を評価する際に用いるルーブリック¹⁾が掲載されているため、そこで取り上げられている項目を学修成果欄へ記述する傾向が見られることである。2つ目として、他人の小論文を添削する（読む）ことを通してはじめて気づいたことを記述することが挙げられる。また、記述内容には、小論文執筆の回を重ねるごとに変化するものではないものがあり、その変化にはいくつかの特徴がみられた。

本稿では、学修成果欄に記述された内容に注目し、小論文執筆の際、学生の意識がどこに向けられているか、意識の変化にどのような特徴があるのかを確認していく。そして、その結果をふまえ、今後学生に対してどのような指導が必要であるか考察していきたい。

2.調査方法

今回の調査では、テキストに掲載されているルーブリックに含まれるチェック項目のうち、学修成果欄への言及が多く見られた10項目（項目①本論の параグラフは「中心→支持→結び」であるか、項目②パラグラフ同士・文同士の接続は適切か、項目③主張を支えるに適切な事実（具体例）があるか、項目④事実に対する適切な

説明および分析があるか、項目⑤事実の説明と意見（分析/主張）とを適切に区別しているか、項目⑥主張は首尾一貫しているか、項目⑦誤字脱字はないか、項目⑧話しことば・くだけた表現はないか、項目⑨一文の長さは適切か、項目⑩読み手を意識して書く（見直す）ことができたか）を取り上げる。（以下、項目番号のみを用いていく）

なお、調査対象は交流文化学部・ビジネス学部の1年生308名とする。

3.結果

本章では、調査で得られた結果を区分・項目ごとに確認・分析し、学生の意識変化にどのような傾向が見られるのか確認していきたい。なお、各項目の詳細に関しては、本章末尾にある表1を参照していただきたい。

調査の結果から、3本の小論文を通し、学修成果欄への言及が多くみられた項目は⑥、⑧であることが明らかとなった。しかし、2項目の数値の変化には違いが見られる。項目⑧の値は小論文Ⅱで急増するものの、小論文Ⅲでは半減している。一方で、項目⑥の値は、ゆるやかに減少しているものの、一定の数値を保っていることが分かる。これに加え、項目⑥の値は3本の小論文を通して、常に上位を占めている。このことから、学生は小論文執筆において主張を一貫させることを最も重要視しているといえる。また、項目②に言及する学生が小論文Ⅱ以降増加することからも、これを裏付けることができる。実際に、小論文Ⅰでは主張を一貫させるために何が必要となるのかということにまで言及する学生は少なかった。そのため、項目②の値は低いものとなっている。だが、小論文Ⅱ以降では、項目②の値には増加が見られる。したがって、学生は小論文の執筆を重ねることにより、主張を一貫させるために必要なものとして、前後の文章やパラグラフに繋がりを持たせることが重要性であることを認識しはじめているといえるのだ。

一方、10項目のなかでは、項目③～⑤に言及する学生は少ない。しかし、項目③、④に関しては小論文Ⅱでは急増している。さらに、小論文Ⅲでは項目③に言及する学生が10項目のなかで最も多いという結果となった。このことから、小論文Ⅰでは事実を提示することの重要

性に多くの学生が気づいていないものの、小論文の回を重ね、他人の小論文を読むことを通し、客観的な事実がなければ説得力のない主張になることや、主張だけでは小論文として成立しないことを理解していることが分かる。一方で、項目⑤の値は3本の小論文を通して下位にとどまっている。つまり、事実と主張とを書き分けることにはそれほど意識が向けられていないということだ。この原因として、パラグラフライティングを正しく理解していない、意識していない学生が多いことが考えられる。実際に、パラグラフライティングに関する項目①の値は、項目⑤と同様に低いものとなっている。

表現に関しては、特に項目⑧において、「これまでに意識して文章を書いたことが無いため、何が正しくて何が間違いかを自ら判断することが難しかった」との記述が散見された。したがって、小論文Ⅰでは、自身の言葉遣いが正しいか否かを意識することのなかった学生が、他人の小論文を読みさまざまな表現に触れることにより、自らの言葉遣い、語彙選択に疑問を抱くようになった結果、小論文Ⅱではこれを意識する学生が急増したと考えられる。実際に学生の記述を確認すると、「他人の小論文を読むことで、どういうものが話しことばなのか具体的に理解し、次からは自分で気づき修正することができた」という内容が小論文Ⅱにおいて増加する傾向にあった。したがって、表現は、一度誤った表現に気づくことができれば、他の項目よりも自己修正が比較的容易であるといえよう。そのため、小論文Ⅲでは、表現以外の項目に目を向けた結果、項目⑧の値が急減したと考えられる。

表現のなかでも、項目⑦、⑧と比較すると項目⑨に言及する学生は少なかった。また、実際に学生の小論文を確認すると、読点を多用するあまり一文が長くなる傾向がみられた。このことから、学生は一文を短くまとめることには意識が向いていないといえる。しかし、小論文の回を重ねることにより、一文を短くすることにより、「文法的な誤りが減る」、「内容が相手に伝わりやすくなる」など、さまざまな利点が生れることに気づき、文を短くまとめることの重要性を実感したとの記述が少しずつではあるが、増加する傾向が見られた。

最後に項目⑩を見てみよう。本項目はテキストに掲載されているループリックには含まれていないものである。それにも関わらず、この点に言及する学生が3本の小論文を通して一定数存在していた。また、「見直しをする際には、客観的に読む（見直す）ことが大切だ」という記述も多く見られた。これには、相互添削の影響が考えられる。学生は、相互添削を通して、目の前で他人に自らの小論文を読まれ、添削されるという経験を。そして、多くの学生は、「日本語表現 T1」以外でこうした経験に触れる機会がない。したがって、相互添削

の経験が、客観的に見直すことや、読み手を意識して文章を書くことを意識させることに繋がっているといえるのだ。

全体を通して言えることは、小論文執筆を重ねることにより、学生の意識がより細部にまで向けられるようになるということである。また、相互添削の経験が、細部に対する意識の芽生えに重要な役割を担っていることも明らかとなった。

表1 調査結果一覧

区分	項目	小論文Ⅰ	小論文Ⅱ	小論文Ⅲ
構成	①	2人	26人	18人
	②	17人	68人	63人
実証	③	28人	61人	135人
	④	11人	61人	25人
	⑤	6人	0人	19人
論証	⑥	91人	81人	64人
表現	⑦	41人	45人	24人
	⑧	61人	114人	50人
	⑨	34人	20人	24人
その他	⑩	37人	44人	33人

4. 今後の課題

本稿では、小論文執筆の際、学生の意識がどこに向けられているのかについて確認してきた。そこで明らかとなった問題点は、事実と意見とを書き分けることに対する学生の意識の低さである。この状態が続くことにより、自覚のないまま他人の文章を盗用してしまう学生が増加する危険性がある。それを防ぐためにも、学生に事実と意見とを書き分けることの重要性を認識させる必要が急務であるといえよう。そのためには、学生がパラグラフライティングへの理解を深めることのできる授業展開が必要となる。

小論文執筆の際、意識すべき事柄を理解することは重要なことである。しかし、意識するだけでは十分とはいえないだろう。なぜなら、学生が修得すべきものは、意識したことを確実に実践できる力であるからだ。その力を養成するためにも、継続的に文章を書く機会を設けることにより、意識したことを実践に移すという経験を積んでいくことが必要となる。また、さまざまな種類の文章を「読む」ことで、語彙力や読解力を養成することも重要となるだろう。

注

1 ループリックは、読解、構成、実証、論証、表現の5つの区分に分けられ、区分ごとに複数のチェック項目が設けられている。このうち、学修成果欄に読解のチェック項目に関する言及がほとんど見られなかったため、今回の調査では読解以外の4区分を取り上げた。